



『オランダのアイリス』、フィンセント・ファン・ゴッホ、1889年、油彩、74x91cm、モナコ・ルーヴル美術館蔵

©Digital image courtesy of the Getty's Open Content Program



『八幡宮前(白鳥)』、藤村光琳、江戸時代、18世紀、紙本金地、横100cm、縦70cm、東京国立近代美術館蔵

新たな沃野をひらく



『夏秋草花図(屏風)』、依羅宗伊年印、江戸時代・17世紀、6曲1隻、181cm×377.9cm、紙本金地、フリーア美術館蔵、https://asia.si.edu/object/F1896_82/

海を渡った法華衆の作品は、洋世絵や絵手本だけではありませぬ。ゴッホの死後、海外にかけられたコレクションの目撃を見る...

なから守り合われていました。また、アメリカ人実業家のチャールズ・ラング・フリーアは自らも同様に日本へ足を運び、光悦や宗達の作品を買い求めました。

安土桃山から江戸時代にかけてさまざま分野で活躍した法華衆の美術は19世紀半ば以降、本格的に欧米へ伝わっていきます。

【おわりに】『新型コロナイア』の取材が困難なため、「世界の文壇との距離」は休載します。

ゴッホの光琳に対する評価は見てとれるように、ジャポニスムの運動は法華美術の権威と密接に結びついていました。法華衆の絵師たちによって生み出された図様は、西洋の絵画や彫刻だけでなく、工芸品を通して広く「民衆」の目へ届けられていきます。

日本美術が少しずつ広まり始めていた1868年、パリで陶磁器やガラス製品の販売に携わるフランソワ・ウジエヌ・ルソー(1807-1890)が、ある食器セットの製作に取り掛かります。

日本の事情を10枚掲いでたこの『新型コロナイア』(『新型コロナイア』)は、素材となり、山の降りしきる中、山の斜面に足跡を落とすから進む人物の横は空に隠れて見えません。



『北斎漫画草紙(巻)』、葛飾北斎、江戸時代・19世紀、版本(錦繪・淡彩摺)、22.7cm×15.6cm、メトロポリタン美術館蔵



セルヴィス・ランペール＝ルソー(平皿) オルセー美術館蔵 Photo:Musée d'Orsay, Dist. RMN - Grand Palais/Patrice Schmidt/di. distributed by AMP

この下絵は、20世紀初頭にはゴッホの手に渡ります。実際の陶磁器や漆器の製作にだけ活用されたかは分かりませんが、光琳が法華美術の担い手であったことを伝えるには十分でした。